

経営倫理学に関する一試論 — デューイからの照射

An Essay on Business Ethics

岩 田 浩
Hiroshi IWATA

経営倫理学は、これまで総じて、規範倫理学に依拠した理論をベースに展開されてきた。すなわち、既に正当化された道徳原理なり規範を個々の経営事象に当てはめるという方法——「トップダウン方式」——である規範倫理的アプローチを採用することで、形式的な理論展開を試みるのが、これまでの経営倫理学の一般的な理論的傾向であったのである。ところが、最近、このアプローチに対する問題点なり限界が指摘されるようになってきた。そして、これに代わるべく、経営倫理学の新たな方向づけのためのキー・コンセプトの1つとして注目されてきたのが、プラグマティズムである。とはいえ、こうした経営倫理学におけるプラグマティズム再評価の兆しは、現時点では未だ概念提起の域を脱しておらず、その内容にまで深く踏み込んだ議論は、ほとんどなされていない。その意味では、経営倫理学におけるプラグマティズム的転回は未完の状況である。

そこで、本論文では、プラグマティズムの伝統に立ち返り、その創成期の代表的哲学者、ジョン・デューイの倫理思想に焦点を当て、彼の思想が経営倫理学の研究にどのようなインパクトを与えうるのかを検討することにした。それによって、経営倫理学における最近のプラグマティズムへの回帰の一助とするのが、本論文の狙いである。

具体的内容については、本文に譲るとし、ここでは、その結論のみ要約しておく。私見では、デューイの倫理思想に見られる3つの特徴——「環境への適応性」、「社会性」、および「動態性」——は、(1)社会的・共同体的存在として人間観に基づく「協働の道徳性」への道を開き、(2)現代の多元的な社会情勢の中で経営と社会との倫理的接点を見出すための有効な示唆を提示し、(3)具体的状況との関係性の中で道徳的価値を創造するという側面を強調することで、経営倫理学の理論研究に一石を投じるものと確信する。総じて、彼の倫理思想は、経営倫理学を形式主義・基礎づけ主義の呪縛から解放するとともに、それを動態的に展開するための貴重な手がかりを提示してくれるものといえる。

ただし、彼の思想といえども万全なものではない。特に、デューイが道徳の創造において反省的思考を強調する際、全体状況を感得する「直観」や「センス」の機能をそこから切り離して考えている点には不満が残る。彼は、これらの機能の重要性を知りつつも、それを倫理学ではなく審美学の中で論じているのである。それゆえ、経営倫理学の更なる理論的発展に向けては、彼の倫理思想とともに審美思想をも吟味し、直観と反省的思考とを連続したものとしてとらえることが必要になろう。

尚、本研究成果は、日本経営学会編『現代経営学の課題』（経営学論集第67集）千倉書房、1997年、に掲載されている。